

会 議 録

会議の名称	多摩六都科学館基本計画策定委員会
開催日時	平成 25 年 12 月 9 日（月）午後 14 時 00 分から午後 16 時 00 分まで
開催場所	多摩六都科学館 201 会議室
出席者	（委員） 縣秀彦委員長、小川義和委員、福本志濃夫委員、高橋真理子委員 （事務局） 坂口事務局長、神田管理課長、豊田主査、内海主任、小菊主任、 寺島 （指定管理者） 廣澤統括マネージャー、高橋リーダー、伊藤リーダー、角田リー ダー、原チーフ （基本計画策定業務受託者） 有限会社プランニング・ラボ 村井良子代表
議 事	1 開会 2 議題（1） 会議録の確認 （2） 基本計画素案の検討 ・ 議事運営（今後のスケジュール、調整方法の確認） ・ 意見集約の経緯等説明 ・ パブリックコメントの状況報告 （3） 市民調査結果の報告 （4） その他 3 閉会
会議資料	資料1 会議録 資料2 多摩六都科学館基本計画素案 資料3 市民調査結果報告書(概要版) 資料4 パブリックコメント実施概況
会議内容	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
発言者名	発言内容 (別紙 多摩六都科学館基本計画策定委員会第 4 回会議 議事録本文)

会議内容

1. 開会2. 議題(1)会議録の確認

○委員長：

前回の会議録は既にメールにて事前配布されているが、何か意見等あるか。特になければ承認されたものとする。

(2)基本計画素案の検討

○委員長：

次に、「基本計画素案の検討」について、事務局からお願いしたい。

○事務局：

基本計画の素案はメーリングリストを通じて確認していただいております。また意見も沢山顶戴しています。これらに基づき、科学館の職員・スタッフ・ボランティア等の意見を加え、パブリックコメントとして11月末から公表しています。こちらについては資料4を見ていただきたい。パブリックコメントの実施概況について書いてあるが、このような趣旨内容で公開をしている。尚、構成市の市役所でも閲覧できるようにしている。科学館のホームページ等を通じて12月25日まで意見公募をしているが今日現在のところまだ意見は寄せられていない。なかなか意見が集まりにくいのが現状だがボランティアスタッフ等から市民代表として、意見を頂戴したいと思っている。

本日は委員会として素案を検討する最後の機会となるが、計画案について一旦「検討終了」ということで区切りをつけたいと思う。今後の予定としては12月25日にパブリックコメントが終了した段階で、再度意見集約をはかり素案を仕上げていくつもりである。市民意見についてはメーリングリストを通じて、委員の皆様の意見を集約し、事務局で回答を用意したいと考えているので協力をお願いしたい。

今後委員会で合議することが困難なことから、今日の委員会では出される意見については極力結論を取りまとめるようにしてほしい。パブリックコメント以外にも今後発生する検討事項については委員長と事務局で調整をし、メーリングリストで確認を図っていく方法で良いか皆に伺いたい。

○委員長：

パブリックコメントは、期限間近にならないと意見が来ないものなのかもしれない。来館している人たちは当科学館に対して満足度が高いということだが、関心のない人たちからは当然意見が来ないであろうということを考えると、結局現状では、関心がある人たちは満足していると考えてよいのか。それとも私達の提案の仕方が市民にとってわかりにくいのであろうか。

○委員：

地域に根ざしている施設ということをもっと直接的なやり方があっても良いのではないかと思う。パブリックコメントで出てきたものに対して、代表的な意見を持つ方々をお呼びしてシンポジウムを行うなども良いのではないか。

○委員長：

その意見については、第1回と第2回の会議の中でも議論をしてきたが、すでにスケジュールが確定している点、受託者が行った膨大な調査の過程で市民の意見を確認している点により、既に網羅されていると考えられるのではないかと思う。パブリックコメントで今まで決めたものを劇的に変えなければいけないような意見が出てきた時には、本日の委員会が最後になることより、意見の調整をとる必要が出てくるかもしれない。

○委員：

私は基本計画が固まってからでもいいと思っている。決まって、「こうなりました」という結果をもって皆さんで振り返ってみましょう、という形でやっても良いのではないかと思う。

○委員長：

わかりました。今出た意見を事務局のほうで検討してもらいたい。
何か他に意見等はあるか。

○委員：

私は皆と話をしながら読んでいるから内容を理解できているが、一般の方には難しいのではないかと思う。資料を作り込めば理解を促すことはできるかもしれないが、どこまでやるのか、という問題もある。

○委員長：

本日の議事の進め方とも関係していることなのだが、今までの調査や議論の結果として素案が出来上がっているわけだが、これは予想していたのとは全く違う等の意見はあるか。

○委員：

問題ないと思う。

○委員長：

では先程事務局から説明があったやり方ですすめていこうと思う。パブリックコメントやボランティア・様々な方々からの意見も想定され、本日の会議でも結論が出ない事項が残るかもしれないが、基本的には議長と組合で責任をもって調整をはかっていくことになるのでご了承いただきたい。

○委員：

異論なし

○委員長：

今後の進め方については了解が得られたものとする。引き続き事務局から説明をお願いしたい。

○事務局：

ここで、組合が立てている予定について、資料を配布し、説明する。(参考2)
今後12月26日の組合議会議員研修会で、素案を基に5市から選出されている議員に説明をする。続いて1月20日ごろに組合管理者(西東京市長)に委員会として計画案を報告し、5市の調整を経た後1月30日の組合理事会で5市の市長の承認、2月12日には組合議会定例会で再度説明を行い理解が得られたところで決定・公表する予定である。

素案の内容については策定作業に当たった受託者より説明をしていただきたい。

○受託者：

スケジュールで、2月・3月にグループインタビューの実施を予定している。これは地域のキーパーソンに集まってもらい、だいたい2~30名でグループに分けてお話しを伺う予定である。併せてインターネットの調査も行い、こちらは調査5で圏域の市民の方たちに行った調査票と同じ内容で、広域版として多摩六都科学館の実績や今後の科学館像に関して参考データとして伺いたい。これらはとりまとめが集中し、あとまわしになってしまったが、来年度やりながら見直しをかけていければと思っている。

○委員長：

これはさきほど委員から意見があったことと同じになるのか。折込み済みということでよいのか。

○受託者：

その通りである。

○委員：

これは公開でやるのか。やるのであれば公開がよいと思う。

○受託者：

最初は試行ということでクローズで行い、よさそうであれば公開することを考えていきたいと

思っている。

○委員長：

スケジュールについては以上でよいか。丁寧に修正も加えながら行っていくことにする。

○受託者：

ただ、最終調整期間が12月25日までなので、パブリックコメントがあつたり皆から意見も出てくるようであれば期限内は修正を考えていきたいと思っているので協力をお願いしたい。

素案の説明に移りたいと思う。

最初、使命と戦略目標の間にビジョンがあつたが、戦略目標と被るところもあり、わかりづらいという意見があつたので見直しをかけた。又、戦略目標については事業ごとに定めたかったので、指定管理者や委員長と話し合い、なるべく単純でわかりやすいものに取りまとめていこうということで5本にした。ミッションや戦略目標に関しては、皆の意見をまとめてひとつにしていく形をとった。今回の資料2でバージョン7ということだが、この時点ではボランティアの方々からの意見が反映されていない。参考1というのが12月5日のリーダー会議で、ボランティアの方々や指定管理者の方々から募った意見を取り入れ、修正した物になる。

1枚目が計画策定のための前提条件としてとりまとめたものになる。計画策定の背景・位置づけ・第2次基本計画の枠組み・現状分析ということでとりまとめている。

○委員長：

資料2と参考1のどちらを見ればよいのか

○受託者：

両方見ていただきたい。今は資料2を見ながら説明をしているが、参考資料1が、ボランティアや指定管理者の方々からの意見が反映されたものである。1頁目の「利用者の満足度が高い」というところに対し、94%という数字はあまりにも高すぎて組合議会の方々等に鵜呑みにされてしまうのではないかという意見があつたので、もう少し詳しく内訳を記載しなおした。また、「弱み」のところ「地元の館と感じられる要素が少ない」という箇所に対して、力を入れている点であるのでもう少し表現を変えて欲しいという意見もあり「地元の科学館 住民意識が低い」に変更した。

2頁目の使命に関しては太字のところを読めば中央部分を飛ばしてもわかるようにした。事業領域としては、科学館事業を中核とし、その周辺に地域拠点事業を据えた。今までも科学館事業に注力してきたと思うが、もっと地域の・地元の・自分の科学館としての認識を広めていこうと地域拠点事業を拡充させていく戦略目標がたててある。途中に挿入してあるスローガン「ともに作りあげていく 多摩六都科学館」は市民の方々・スタッフ・組合等科学館に関わる人たちすべてと共有したい活動指針として掲げた。3頁のロードマップにある『「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はすでに達成できている』と言い切ってしまうとよいものがあるか、今後もこの活動を中核として続けながらさらに幅を広げていくということが伝わるような文章にしたほうがよいのではないかという意見があつた。また科学館事業が中核であることを明確に伝えたいという意見もあつたことから、この部分に関しては（参考2のように）修正を加えた。事業領域の図の中、事業計画の欄の科学館事業の下にも、それぞれ「中核事業」と入れ込み、色付けをして中心であることを強調した。戦略目標の科学館事業の文言も先の意見を取り入れて少々変更した。これは現場の方・ボランティアの方等事業に関わっている方々が方針を明確に理解できるように工夫したものである。さらに、3頁目の科学館事業においても『「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はこれまで通り大切にしつつ、幅広い年齢層も利用できる施設へと徐々に転換を図る。多くの方々が科学の楽しさに触れ、新たな価値を発見できる科学館像の実現をめざす。』と改めた。細かいところではあるが皆と誤解が生じないようにすすめていくためにこれらの変更をした。その他の点では、2頁目の使命・戦略目標・戦略を矢印で示し、最終的に使命に到達するように記載していたが、ボランティアの方々でこの矢印の理解ができないという声もあり、この3つを棒線で繋ぐように表示をすることにした。同様に1頁のピラミッド型の構図が理解できないとの声もあつたが、こちらに関しては敢えて変更をせずそのまま残した。表現では、地域拠点事業の項目に出てくる「たまり場・ハブ」という言葉が砕けすぎた表現ではない

か、敢えて入れておくべきかという意見も出たが、現場の方々の中では浸透してきている言葉であり、「気軽にもっと科学館路利用して欲しい」という思いを込めた重要な表現と判断して残しておくことにした。

地域拠点事業は2つになったが、この2つに関しては始まったばかりであり、これから遂行していくことになるため、徐々に達成していききたい事柄として、ロードマップでは薄い色で表示をしてある。優先順位としては「交流拠点」をまずは先に整理をし、次に「創造拠点」を目指すことを考えており、業績指標の目標値を定める時にこれに倣って設定されていくことを想定した。

マーケティングは当初『地域住民の科学館に対する価値観を高めていく』としていたものを『「自分の・地域の科学館」として地域住民から愛される科学館を目指す』に変更した。これは皆に自分の科学館・地域の科学館として認識してもらいたいという思いからこの言葉を入れ込んだが、当初の文言から少々ニュアンスが変わってしまっているようにも思えるので、ここは皆から意見を頂戴したい。

財政計画の戦略目標には特に変更点はない。

○委員長：

只今の説明に関して意見や質問があればお願いしたい。

○委員：

あくまでも科学館事業が主体であり、その実現を充実させるために地域拠点事業があるということだよと思うが。

○委員長：

もう少し目立たせた方が良いか。市民がぱっと見てわかるようにしないといけないと思う。

○受託者：

(実際公表しているものは) カラーで目立つ色にしてある。

○委員：

優秀な人材を確保および育成というのは、どうしていくのか。これを外に公表するものに記載する必要があるのかと疑問に思うが、科学館事業をしっかり遂行していく上では職員の育成や成長・研修・職員の満足度等は必要不可欠である。

これが財政計画に入るのか、マーケティングに入るのか、科学館事業に入るのか難しいところである。

○受託者：

「優秀な人材の確保および育成」については、3頁の財政計画に業績指標として記載をしている。

○委員長：

成長や満足度についてだが、職員が日々行っていることに対して自己の成長度合を認識しているか、自己点検や第三者評価等によるものになってくるのではないか。

○受託者：

個人のモチベーションもあがってきていると思うので、これに比例して満足度も上昇してきているのではないかと思う。スタッフの満足度に関して取り入れている館も多くはないと思うが、個人個人が成長していけるモチベーションは重要なので、こちらに記載しても構わないのではないかと思う。

○委員：

職員の満足度はとても重要なことであると思う。10年後にはどうなっているのか。これが組織の成長にもつながることだと思う。個人個人が成長していけるモチベーションがないと絵に描いた餅になってしまう可能性がある。一人一人のミッションをきちんとこなし、一人でもお客さまに説明したり誘導したりできるように、自分の成長が組織の成長につながり、組織の成長が自分の成長につながるというものが必要であると思う。

○受託者：

事業評価に関しては、管理者に説明をしてもらいたい。

○委員長：

ぜひ、お願いしたい。業績指標があるが、自己点検を行うことや指定管理業務に関する評価をどうしていくかということが必要なのではないか。

○管理者：

事業評価委員会からいくつか意見を頂戴している。以前のものよりも目標設定が明確になり、戦略目標からブレイクダウンしていく過程が非常にわかりやすいという意見もあった。事業評価委員会としてはこの計画案は前よりも非常によくなったと感じるということであった。事業評価委員会の位置づけは、管理者の諮問機関であり、全体のプロセスを含めて外から評価する立場にある。

○受託者：

資料2の1ページの図をみていただきたい。事業評価・自己点検・外部評価とあるがこのような形になっている。

○委員長：

了解した。

○委員：

マーケティングのところでは利用していない人々に対してどのように対処していくか、この10年間を考える上で重要なのではないかと思う。利用していない人々へのアプローチの仕方、利用していなかった人々が利用するようになったかどうか指標をつくるべきではないか。また、財政計画の中で交通面の改善の実施－「交通の便を改善し利用しやすい科学館」としての評価、とあるがこれは財政計画なのかマーケティングなのか非常に悩むところであると思う。どちらがよいのか、私自身も回答に悩んでいる。マーケティングのような気もするが、やるには財政的な基盤必要ということで財政計画に入っているのであろうか。

○受託者：

実施したあとに住民からどのように評価されたかという効果を見るために「交通の便を改善し利用しやすい科学館」という項目を入れた。先ほどの利用されない人々へのアプローチは「地域住民の科学館の認知度・利用度・満足度」の中に含まれてしまっているのでこのあたりをもう少しブレイクダウンしてわかりやすく示そうと思う。

○管理者：

補足だが「交通の便を改善し利用しやすい科学館としての評価」と「駐車場の再整備」はセットで考えている。自動車で来る方が非常に多い施設であるためこれをどう捉えるかが一つの問題である。今後も自動車利用が中核にならざるを得ないと想定し、今年度約6億円かけて土地を取得し、駐車場を整備しようと考えている。従ってこのあたりは財政に大きく関わる問題として、財政計画として位置づけがなされている。

○委員：

なんとなくこの素案がまとまってきたが、それぞれの方向性を決めるだけでよいのか

○管理者：

そういうことになると思う。

○委員：

科学館事業のところ、アウトリーチ活動の話があったが、外にでていくというやり方もあると思うが、来てもらってこの館を使ってもらうことで地域活動がより充実していくような提案ができると思う。駐車場を作って利用者に対するサービス向上を図るという考え方も当然あるが、自転車利用に関する指標・目標をいうものを今回は据えないのか。

○管理者：

中央線沿いではレンタサイクル・コミュニティサイクルなどができており、西武線のほうにもだいぶ広がりつつあるので、以前から自転車利用に関しては着目している。このシステムを科学館にも取り入れることができれば、最寄りの駅から好きな所まで自転車で来れるようになる。今、指定管理者とともに研究中であり、今後導入できるのであれば活用していきたいと考えている。

○受託者：

「直接関与しなくても、ここで学び、知識として得たものを地域に出て行ってボランティアの方々が活動を広げていく」という先の委員の意見はメーリングリストでも頂いており、この素案に盛り込んだつもりであった。ここからそのニュアンスが読み取れないようであれば、再度検討するようになりたいが具体的にどのようにしていけばよいか。

○委員：

教室を開いたりすることでもよいと思う。外に科学館のサテライトがあるなどはどうか。科学館で学んだ人たちがそこで興味深いことをしているという分室のようなものでもよいと思う。

○受託者：

2年間ボランティアを育成し、地域で環境保全関係の活動をしてもらうという京都の京エコロジーセンターというところがある。このような形のやり方もあるのではないかと思う。コンテンツやプロダクトというものがあるが、ここに人も含めて地域に出て行ってもらう考え方もよいのではないかと思う。

○委員長：

この現状値は二重丸なのか。今聞いている限りであると二重丸であると評価できないように思うが。

○受託者：

二重丸という評価は市民調査の結果があり、現状値が把握できているという意味である。

○委員長：

理解した。

○委員：

ミッションの戦略目標の文言はスタッフの方にどのように浸透させるのか。例えば毎日読むなどということはあるのか。スタッフ一人一人が誰にでも言葉として説明できるようになるのか。そう考えると文言が少し長く、覚えられないと思う。凝縮されていて良い言葉であると思うがやはり長く覚えづらいように思う。

科学館事業のひとつとして「科学の楽しさ」を伝えることが柱になっていると思うが、科学教育は楽しさという言葉だけでは表現しきれないもの—たとえば原発の問題などの情報をどのように取り扱っていくのか気にかかる。科学の一面しか伝えようとしていないように感じる。

○受託者：

科学を自分のものとして考え、正しく理解した上で、科学を使っていくというニュアンスはどこかに入れ込みたいと思っている。

○委員長：

私も先ほどの委員と同じことを考えていた。科学リテラシーを明確に謳うべきであると思う。科学は楽しいだけでは済まないところがある。一番メインなのは科学リテラシーであるが、科学の担い手を育むこと、産業を活性化させることも盛り込むべきではないかと思う。

○管理者：

もともと生活者としての視点でやっていこうと考えており、当館は生活と密着し結びついた科学を入口にしている。スタッフも圏域に住んでいる人が多いので、圏域住民として生活者の視点から科

学を提供することを考えている。この文言をどう掲げていくかということだが、これらの文言がスタッフの気持ちとかけ離れてしまうようではいけないと思う。生活者としてどのように科学と向き合っていくのかということはこの文言の中にわかるように入れていきたい。

○委員長：

先の10年計画では「文化としての科学」という言葉を掲げていた。これが前回までの会議でもわかりにくいとの声が多かったので、今回わかりやすく書かれていることは大いに評価できるが、一方で子供達の道筋や産業の発展ということも記載するべきだと私は思う。その点はどうか。

○管理者：

ここには出ていないが、決して科学館としてなくしてしまったわけではない。定めてきた5つのミッションステートメントは別のところで活用していこうと考えている。「人間と科学の調和」「文化としての科学」等の文言は、たしかにわかりにくいとは思いますがこれらに含まれている考え方というものが非常に重要であると思う。

○委員長：

今までのところで何か意見はあるか。

○委員：

私もまったくそのように思う。ミッションステートメントの太字ではないところに先ほどの意見が出た項目を入れ込むのはどうか。細字の下に、今言われたような生活としての科学力等を平たく書くのもよいのではないか。

○受託者：

検討してみたい。

○委員長：

他に意見等はあるか

○委員：

評価等に関わる場所であると思うが10年というスパンでの計画なので、ここで色々な体験をした人々が10年後どのようになっているかという、経験が何を生み出してきたかという評価などというものも取り入れるべきであると思う。

○受託者：

「多摩六都科学館の10年間の活動は、自分にとって、あるいは地域にとって価値あるものだったと思いますか」という設問を市民に投げかける調査をして長期の成果をはかっていると考えている。

○委員長：

他には特にないか。

○委員：

2頁の地域拠点事業というところにもかかわると思う。

○委員長：

財政計画であるが、10年ということになると、建物や展示物の補修やリニューアルについて考えていくことになると思うが、その点について特記していくことは特にないか。

○管理者：

今建物・施設の老朽化が大きな課題になっている。現在基本計画とは別に調査をしている。基本計画とセットになるように策定していくつもりである。駐車場の用地の確保で大きな金額を借入することになるので償還と合わせて設備の更新等を慎重に考えていきたい。

○委員長：

プラネタリウムの更新・常設展示のリニューアルに関して特にプラネタリウムのためにきちんと積み立てをしてきたことは、この施設が成功している最大の理由だと思っている。これからの10年後20年後も上手く財政的な計画に沿って更新していけるように期待したい。

今まではこの館に足を運んでもらうということで計画をしてきたが、今後は地域拠点事業として、館の外に足を運んだり、サテライトの計画などはあるのか。

○管理者：

遠隔地の問題として5市の中でも遠い所にはどのように出張等をして対処していくか、拠点化をしていくかという発想は持っている。先ほどのところで一点付け加えたいが、施設の修繕・補修に関しては基本計画に沿って別途結果を考慮して何年後にどのように補修予定を組んでいくか等を基本計画に盛り込んでいきたい。

○委員長：

展示物の貸し出し・スタッフの出張などを謳わないと、地域拠点というイメージが定着しないと思う。来てもらうだけの施設から、これから10年で大きく変化しようとしているのであれば、変化することを視野に入れていることがわかるような書き方をしたほうがよいのではないかと思う。

あと、以前からの議論でもあったがカフェやショップはどうするのか。

○管理者：

カフェとショップに関しては個別に指定管理者が行っている業務の改善の一環として行っていく。カフェが大きな外食産業としては成り立ちにくいことを考え、マイナーチェンジをはかるのが現実的であると考えている。

○委員長：

多摩六都のオリジナル商品も今後期待されるように思う。

1頁目にある「高齢化」について私は脅威であるとは考えていない。むしろチャンスであると思っている。経験豊富で生活が満ち足り、世の中のためにできることを模索している高齢者こそ財産だと思う。少子化は確かに脅威であると思うが。

○受託者：

脅威とも機会ともとれると思う。

○委員長：

高齢者のような人たちが活躍できる場を作るというのが生涯学習拠点なのではないか。科学の専門家がいて、というのも内部から見ればそうかもしれないが、外部からはそう見られていないと思う。何十年も地域に根ざし、地域の方々とコラボし、大学や企業と連携できるような人たちがいないと専門家がいないとは認識されないと思う。もし今の指定管理制度でそれが可能になるのであれば大々的にアピールをしていくべきであると思う。また7年後のオリンピックに向けて外国語対応やバリアフリーなどユニバーサルデザインを考えていくことも大切なのではないのか。

○委員：

科博などでも外国語対応に力を入れようとしている。

○委員長：

この辺りも大事なこととしてどこかに記載しておきたい。

○委員：

上手く東京都のオリンピック対策とリンクさせていきたい。面白い企画や展示もできるのではないか。

○委員長：

オリンピックが開催されるとなればこれを利用しないわけにはいかない。こうした大々的な行事が

ある以上は多摩六都が無関心な態度をとるわけにはいかないと思う。チャンスであると思う。

○委員：

オリンピックの裏側を支えているのは科学である。オリンピックに関することやスポーツに関して展示をするのも良いと思う。

○委員長：

このほかに気になった点などがあるか。

○委員長：

学術機関や地域産業との連携について明記するほうがよいのではないか。

○受託者：

書いているつもりであるが、もっと強調したほうがよいか。

○委員長：

そうしたほうが良いと思う。

科学館事業の中で資料収集・調査研究事業が大切ということが前回の議論で出たが、この点については明記しないのか。

○受託者：

科学館事業についてのところで、その点を補記するようにする。

○委員長：

是非お願いしたい。

○委員：

調査研究・資料収集を謳うなら使命の中に入れた方がよいと思う。

○委員長：

何度も話し合って合意したので今から使命に手を加えるのは難しいと思う。事業計画の科学館事業に入れるのは可能であると思う。

○委員：

割合として調査研究・資料収集とはどのくらいのつもりなのか

○管理者：

研究や調査をするベースが特にないので、できることからやっっていこうと考えている。割合としては3割以下を考えている。

○委員：

この地域において、自然や人間の営みを記録し保存していく施設としての役割を担っているのか。

○管理者：

一時期は保存・収集に力を入れようと考えていたが収蔵庫がない。今から収蔵庫をつくることなど考えるのは困難。展示において自然史系のものを増やしたというのは教育普及に力を入れていく中で実現できてきたことである。今後そこにどれだけの支持が得られるかということになってくる。今現在保存収集ができる館が多摩地域にもなくなってきているので、できる限り力を入れていきたいという気持ちはある。

○委員：

パルテノン多摩の中に自然史系の施設があったように思う。

○委員長：

戦略に入れるのが望ましいと思う。謳っておかないと住民からの寄贈がなくなってしまう可能性もある。しっかり書いておいた方がよいと思う。

○委員長：

ではここまでのところよいか。大きな枠組みでは変更はなく、今議論した表現や欠けていたことを加える以外は原案通りで承認されたということにしたい。

(3)市民調査結果の報告

○委員長：

受託者より資料3についての説明をお願いしたい。

○受託者：

こちらの資料3はパブリックコメントと一緒にホームページに掲載したものである。中間報告で既に報告は済ませてあるので、実施概要については省略する。全体計画ではインターネット調査とグループインタビューがまだ実施されていない。先ほどスケジュールで話をしたように、ある程度計画案が固まったところでこれらについては実施をする予定である。

調査結果概要についてだが、(資料3：9頁参照)調査2が館内調査、調査5が圏域内調査になる。この2つの大人のサンプル特性は、年代については30代・40代の親の世代が多かった。圏域内調査では比較的時間に余裕があり、一人で来ている60代・70代の方が多かった。30代・40代は館内では協力的であったが、圏域内調査では友人同士で利用している場合回答を拒否する傾向も見られた。住所は、館内調査では西東京市・小平市等六都圏域からの使用者が4割を占め科学館の近郊である練馬・小金井市からの利用も多く見られた。居住歴は圧倒的に「最近～9年前」の方が多い。圏域内調査と比較すると高度経済成長期に新住民として圏域に移住した「40～59年前」の方や「20～39年前」の方々の利用が少ない。よく利用する施設については、2つの調査を比較すると科学館利用者は家族連れが多いため、地域の公園、小金井公園、江戸東京たてもの園の利用が多い。また科学館利用者は美術館を利用することが多く、圏域内調査においては圧倒的に動物園・水族館・植物園が多い。

児童のサンプル特性としては、学校調査では小学校4年生が多いため調査3では年齢が偏ってしまっている。圏域内調査と比較すると館内利用の児童は6年生が多く、2年生の割合が少ない。圏域調査では図書館やホールといった施設の利用者を調査したため6年生が多かったと考えられる。館内調査は児童も大人と同様に、西東京市・小平市を中心に多摩六都地域からの使用者が4割強を占め、そのほかは練馬・小金井・三鷹市などの均衡からの使用者が多かった。学校団体の利用は、多摩六都地域の利用が6割強を占めているが、都内からの利用も4割強を占めている。

多摩六都科学館の認知度については、高いと言えるものの、名前を聞いたことがないと答えた人が15パーセント近くいた。クロス集計の結果から60年以上前から居住している旧住民の認知度が低い。最近越してきた特に20代の人々においてはまだ館の存在を知らない傾向も見られた。

多摩六都科学館の利用度については、大人は圏域内調査においては「知らない」「まだ利用したことがない」を合わせると44%にのぼった。利用回数は館内・圏域内調査とも「3回～9回」が多い。児童においては、「知らない」「まだ利用したことがない」を合わせた非利用率は大人の割合よりもかなり低く8.2%。館内も圏域での調査も児童はリピーターが多い。学校団体の利用の児童ははじめての割合が高い。前回の来館時期を調査したところ両調査の児童も大人も館内も「数か月前」に来館している割合が高い。同行者については圧倒的に「家族で」と答えた人が多かった。圏域内調査においては「家族で」と答えている人が多いものの、友人やひとりでの利用と回答している人も多く見受けられた。これまで利用しなかった理由に関しては「交通の便が悪い」「具体的にどんなことをしている施設かわからない」「場所がわからない」「遠いから」が挙げられる。その他としては「自分の子どもが小さいから行くのにふさわしい場所ではない」と判断してしまっている傾向が見られる。しかしその一方で館内利用者からは「幼児でも十分に楽しめる場所」との認識がある。自治体別のクロス集計からは、清瀬市から特に「交通の便が悪い」「子どもがいないから」が多かった。東久留米市からは「具体的にどんなことをしている施設かわからない」が多い傾向が見られた。

多摩六都科学館の満足度・科学への興味喚起度については、大人の館内利用者は「満足」の割合が6割強。「どちらかといえば満足」を足すと9割強にのぼる。大変満足度が高い科学館と言える。圏域内調査では「満足」よりも「どちらかといえば満足」と答えた人の方が多くが科学館利用経験者のみの数値を見ると「満足」「どちらかといえば満足」を足すと館内調査同様9割強を占めていることになる。児童も館内調査では8割強が「とても満足」と回答している。圏域内調査でも科学館利用経験者のみであれば「とても満足」の割合は74.6%を占めている。「とても満足」「やや満足」を合わせると3つの調査とも利用経験者では95%以上と非常に高いことがわかる。クロス集計から、「満足」と回答した人が低いのは館内調査では50代、圏域内調査では60代、居住歴40～59年前の新住民の方々であることがわかる。これらの利用者層は利用しているのにもかかわらず満足度の設問に回答していない傾向もみられた。随分前に行ったことがあるがよく覚えていないということも考えられる。各施設の満足度については、満足度が高いのはプラネタリウムであった。次に常設展示・イベントホールが続く。幾分不満足度が高いのはカフェ・ショップ・図書コーナーであった。各施設の利用度が高いのは地下1階の施設であった。次に2階のプラネタリウム・休憩室・カフェと続く。館内スタッフに対する満足度は「満足」「どちらかといえば満足」を合わせると85%が満足している。無回答を除くと満足の割合は7割ほどになり、プラネタリウムに次ぐ満足度となっている。科学への興味喚起度については児童（3つの調査）と圏域内調査の大人を対象に行った。科学館での体験を通して科学への興味が喚起されたかを調査した。学校団体での利用の児童は学習のモチベーションが高いためか「とても増した」が多い傾向がある。「少し増えた」も合わせると9割強となる。個人利用の児童は、館内も圏域内調査（利用経験者のみ）は「とても増した」「少し増えた」も合わせると約8割を占める。児童にとって多摩六都科学館での体験は個人・団体どちらにおいても「科学への興味喚起度」が高いことがわかる。圏域の大人の場合でも利用経験者のみであれば「とても増した」「少し増えた」を合わせると約8割を占めている。

多摩六都科学館の魅力・価値において館内利用者（大人）から「価値ある」と評価されたのはプラネタリウム・遊びながら楽しく科学が学べる・参加体験型の施設という点である。ボランティアスタッフからはプラネタリウム・地元密着の点が評価され、団体利用の学校幼稚園からは圧倒的にプラネタリウムとの意見が多く、続いて体験型・地元にかかれた科学館という点が支持されていた。

過去10年の目標・役割の達成度についてはすべての調査で「次代を担う子どもたちの夢を育み、科学する心を養うことが出来る科学館」「科学の専門性とエンジョイメントの両方を提供できる科学館」の「大いに感じる」の割合が高い。一方、生涯学習・地域の拠点施設としての評価が低い傾向が見られた。ボランティアスタッフからの評価では「大いに思う」との回答が一般利用者に比べると少ない傾向が見られた。非利用者が含まれている圏域内調査では判断ができないため「分からない」という回答が多かった。利用者と非利用者を比較すると「分からない」の割合が明確に異なることがわかる。データーチャートで調査間データを比較すると、団体利用の学校や幼稚園から「科学の専門性とエンジョイメントの両方を提供できる科学館」としての評価が高い。一方、「地域の方々が世代を超えた交流や自主的な活動を行うことができる拠点施設」「文化としての科学を追究する多摩・武蔵野地域の生涯学習拠点」に対する評価は他と比べると低い傾向にあった。

これから先10年の科学館像・地域の拠点施設像についての「科学館像」という選択肢はワークショップやボランティア調査で出た結果を活かして作ったものである。市民から求められている科学館像は「遊びながら楽しく科学が学べる科学館」「学校とは違う体験や学習ができる科学館」という声が多かった。大人の調査では圏域内の市民と館内の利用者で、求めている科学館像に違いが見られることがわかった。館内利用者よりも圏域市民に多かったのは

- ・「交通の便を改善し、利用しやすい科学館」
- ・「地域の誰もが科学を楽しめる、引き出しがいっぱいある科学館」
- ・「地元の人々に愛される科学館」
- ・「地域の資源（自然・文化・人等）を生かした運営」
- ・「生涯学習拠点としての充実」

であった。児童では「本物に出会える科学館」「親しみやすい科学館」に関しては館内利用者と圏域市民では差が出ていた。館内児童は高く、圏域内の児童では要望が高いことがわかる。「館内スタッ

フとの交流を重視した科学館」は全体的に低いのは科学館でスタッフと交流できることを知らない児童がいる可能性があるといえる。大人のランキングでは生涯学習に関して、館内利用者・圏域市民ともに低い傾向が見られる。科学館に求められる体験型とはどのようなものなのか、第2次基本計画ではどのような方向にシフトしていくのか考えていく必要があると思われる。子供のランキングにおいても「親しみやすい」「身近な」「館内スタッフと交流がある」科学館像については3つの調査とも低い傾向があるので第2次基本計画ではこの点を踏まえ今後の方針を決めていきたいところである。今すでにできており、子どもたちが将来も望んでいることに関してもどのような方向で事業を成長・展開させていくのか十分に検討することが求められる。

○委員長：

この調査が素案に活かされているが、何か意見等はあるか。

○委員：

この調査結果から人々が求める科学館像に対してどういう価値観を見出したと思うか。一言でいうとどんなことになるか。

○受託者：

設置目的から言うと生涯学者や地域の人々が世代を超えて、というのはあったわけだが、過去の実績からいうとこのあたりが弱く、一般の市民からもそれほど求められていなかったが、圏域の市民の方々にとってはこれに関する要望が館内利用者より高いことがわかった。来ていない方たちに利用してもらうためにはこのような要素も強く打ち出していけば利用される可能性も高いのではないかと思った。

○委員長：

「次世代を担う子どもたちの夢を育み科学する心を養う」ことや「科学の専門性やエンジョイメント・楽しさの両方を提供する」「各世代にわたって生涯学習ができる」等の文言がもっと戦略の中に入れてきてよいかもしいかなと思う。

○受託者：

科学館事業においては資料2の3頁のところでそれらの色を出し、「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はこれまでどおり大切にしつつ、と記載している。

○委員長：

その通りであると思う。他に何か意見等あるか

○委員：

やっぱりこの館の魅力はプラネタリウムなのだと思う。魅力と価値が評価されているプラネタリウムが伸びればおそらく全体の満足度も比例して伸びてくるのではないかと思う。新しいものを作るにはニーズではなくシーズを作っていくことが必要である。これをどうやって作っていくかが問題である。

○受託者：

圏域市民ではまだリニューアルしてから来館していない人も多い。一度ラボなどを体験してもらえばプラネタリウムと双壁になりうるのではないかと思う。

○委員：

確かに、まだ知られていないところがあるかもしれない。

○受託者：

来年やもう少し後に調査をしてみると変わるかも知れない。

○委員長：

JPAの総会が開かれ時、過去最高に人が集まり、大変評価が高かった。その理由はギネスに認定さ

れていて星がきれいだというところもあるが、できた当初から人気が高い施設であった。集客力のある施設であるし、家族だけでなくカップルなどの利用もあり、普段科学館を利用しない層がプラネタリウムを覗いたついでに科学館をみていくというのも強みであることは確かである。ただ、委員の方々も言われた通り、プラネタリウムだけに頼っているわけにはいかない。ラボなどを作る等の改革をしたので、その成果はこれから現れるのではないかと思う。

○委員：

プラネタリウムは単なる学習ではなく眺めることができるものであると思う。一方展示はそういうわけにはいかない。水族館や美術館利用者も同様に可能である、眺めるとか癒しとかいうものをなかなか科学館の展示にこういった要素を取り入れるのは難しい。客層の違いがある。

○受託者：

科学館利用者に調査したところ美術館の利用者が多いということだったので今の話と合致すると思う。

○指定管理者：

プラネタリウムをデジタル化したという点はすごく良かったと思っている。これまでの映画と現在の大型映像は観察の視点はかなり変わったのではないかと思う。そういう意味では新しい視覚装置を作ることができたと思っている。星も本当の星に近づき、リアリティを増し、眺める価値があるものになったと思う。昨年 18 万人の来館者に対し、プラネタリウムの利用者は 10 万人であった。- 半分以上の方がプラネタリウムに価値を見出しているといえると思う。

先程「科学リテラシー」という話が出てきたが、すごく大切だと思う。ここに「遊びながら楽しく学べる科学館」「学校とは違う体験や学習ができる科学館」ということが入ってくると何ができるのかということになる。そうするとやはり「科学する」すなわち「Do Science!」ということになるかと思う。つまり観察や工作、実験など家庭や学校でできないものである。実感を伴う体験がリテラシーに還ってくるのではないか。実感を伴った理解というのが今科学館の目指すべきポイントなのではないか。

利用されていない方のニーズについては、地域の良さを発信することもひとつの任務であると思う。中核事業と二本柱になっていくのではないかと考えている。

○委員長：

おっしゃる通りだと思う。全体を通じて何か意見はあるか。

○管理者：

これから検証していく部分は大切だと思う。調査は今回限られたところしかできなかったが、マイノリティの方々への調査などをしたかった。ハンディキャップを持ったユーザーも多いのでそのようなの方々への調査も進め、今後計画に付加していきたいと考えている。

(4)その他

○委員長：

その他連絡事項等何かあるか

○管理者：

今日で第2次基本計画の全容がまとまったものと考えている。次年度からの第2次基本計画の運用が肝心の点になっていく。指定管理者と組合が協力をして新しい計画に沿って遂行していくことになるが、計画策定者として委員の皆様からまた改めて意見を頂きたいと思う。

○委員長：

一言ずつ委員の皆様から頂きたい。

○委員：

あとはスタッフがどれだけこれらの文言を噛み砕き、自分の身に浸透させことができるかだと思

う。ユニバーサルデザインについての意見が出ていたので、この言葉が文言のどこかに入っていると良いと思う。

○委員長：

財政計画に入れても良いのかもしれない。

○委員：

ユニバーサルデザインというとなんかすべてが含まれるのでその言葉があるだけで随分違うのではないかと思う。

○委員：

実際にこの計画案を使用する人たちが、もう一度落とし込んで自分の言葉に変えていく作業ができる時間、自分の言葉に変えたものを原案と比べることができる時間があればよいと思う。

○委員：

計画は大きく書かれているので、実際の業績指標は都度変えていっても良いのではないかと思う。ユニバーサルデザインの話だが「ともにつくる」ことが重要で、ハンディキャップのある方々とともに作り上げていくしくみができたらよいと思う。

○受託者：

事業計画は指定管理者が年度ごと考えていくことになり、業績指標もそれに則って見直しをはかることになると思う。今まであった指摘はこの部分で解消できるのではないかと思う。

○委員長：

計画策定の作業を通じて、スタッフの方々が自分の事とし、思いを馳せ、共有し次の10年位に向けて計画を策定できたことは大変良かったのではないかと思う。今後話し合うときにわかりやすく階層を作ることが出来たと思うので、上手く情報を共有していくことが重要であると思う。スタッフの熱意と人柄がこの館の一番の財産。今のよいところをさらに伸ばして行ってほしい。

○管理者：

今日の結果については後日改めて会議録で確認をしてほしい。本日欠席の委員にも連絡をし、今日の皆の考えを報告することにする。

3. 閉会